

発表 No.7 (後半・room2)

実践発表

両方の国を愛せる子どもに育てる日本語教育!
—多言語活動を通じた多様性豊かな地域・学校環境づくり—

発表者氏名 芳賀洋子 (所属 あそび舎てんきりん さいたま市)

1 実践の目標…日本社会にある課題と多言語活動の意義

表題の「両方の国を愛せる子ども」とは、子供の時に来日したSさん(スリランカ出身)・Kさん(フィリピン出身)との対話を通して、大学生が発した言葉である。「両方の国を愛せる子ども」になるかどうかは、親子だけで解決できることではなく、取り巻く人たちや環境の在り方が問われている。日本語教育には、1)日本語学習を保障する 2)多文化共生社会を作るという両輪が必要であり、「両方の国を愛せる子ども」になるための教育が求められている。母語を大切にしながら多言語活動を、多文化の親子、参加した日本人の双方に変化を生み、しかもだれでもどこでも活用できる方法として、教育現場にも広めていきたい。

2 実践の場の特徴…地球っ子グループてんきりんの「にほんご畑」を中心に

地球っ子グループは、外国ルーツの子供たちが日本で力を伸ばして自分らしく生きるように願って活動している。2000年に親子の日本語教室「地球っ子クラブ2000」が発足し、その後、子供たちやその保護者との関りの中で感じた気づきをその都度形にしていっていった結果、子育ての会Coconico、多文化多世代の学びの場「てんきりん」が生まれた。3部門は、ある時は一体として、ある時は独立して活動しているが、①対話や活動を重視②みんなの活躍の場を作る③それぞれの母語を大切に④日本人も変わろう!多文化共生の街づくり…という4点を共通理念としている。今回の実践の中心となった「てんきりん」は、地域の人たちが集まって、思い思いにグループを作って楽しんでいる拠点である。そこに、「にほんご畑」があって、日本語のレベルに関係なく集まり、時に地域の日本人も加わっておしゃべりの時間帯が生まれる。「にほんご畑」は、そんな多様な人たちが気軽に集まる場でもある。

3 実践 「にほんご畑」での出会いと学びから、多言語活動を通じた発信へ**3.1 「にほんご畑」での対話型プログラム～おんなじって嬉しい!ちがうって楽しい!～**

「にほんご畑」への参加対象者は、外国出身者(日本語能力は問わず)とボランティア体験希望者(大学生・行政・日本語関係者等)で、この時点では、ZOOMで開催。参加者全員での活動と、ブレイクアウトルームを活用した個別活動を組み合わせて、外国出身者の母語や文化についてもたくさん話す。日本人が教えてもらう名人になることで立場の逆転を生み出し、対等の関係の中で外国出身者の良さを引き出し、発信へとつなげるステップとした。

3.2 「にほんご畑」から地域社会へ(1)外国出身の市民の活躍**① 市立図書館多言語交流会(10月23日、市民対象、参加者21人、図書館との協働)**

バンラディッシュ出身の親子が講師となってベンガル語の言葉遊び(『挨拶絵本』『おおきなななぶ』を使って)やワークショップ(ベンガル語で名前を書く+伝統的なアルポナ模様を組み合わせてしおりやカードを作る)を開催。図書館側が関連書を用意してくれたので、参加者から多くの質問が出て、親子は生き生きと答えるなど、自然な交流が生まれた。

3.3 「にほんご畑」から地域社会へ（2）大学生と外国ルーツの若者の協働と発信

日本語教育研修会（12/18 9:00～12:00、多文化の子供に関わる人を対象、参加者 33 人）

「にほんご畑」で出会った大学生と S さん・K さんがチームを結成して研修会「多様な出会いから生まれる学びと変容」～おんなじって嬉しい！ちがうって楽しい！～を企画・実施。内容は、S さん、K さんの体験談、それぞれの母語を使ったゲームや文字活動などを軸に、大学生が主導し、多様性豊かなプログラムを広く地域社会に発信することができた。

4 実践の目標が達成できたかどうか～振り返りの会とアンケートを通して見えたこと～



初めて見た文字が新鮮だった／外国の人が生き生きしていて素敵だった／文字遊びやゲームが楽しかった／日本語を勉強する大変さがわかった

図1 多言語交流会の様子と、多文化の子どもの作品 図2 参加者のアンケート（一部）

公の場で、日本人観客から拍手を送られる母親を見て、子供たちの表情は目の前で変わり、参加している日本人のために積極的に文字や模様を描いてあげ始めた。母語を大切に思う子供たちを育てるのは親子だけでは難しい。これは、参加した人たちの意識の変化に大いに助けられたものであり、日本の子供たちにとっても、いい体験なるはずだ。



自分たちが主体的に動いたことで、自分が変わった／いろいろな人との交流がこんなにも楽しいとは！／自分の工夫で通じた時はうれしかった／日本語の壁を作らない。／楽しく学ぶことの大切さ／みんなの前で話すことで子どもの時の気持ちが整理できた(Sさん)

図3 大学生がリードした対話の時間 図4 大学生チームの振り返りから（一部）

2/20 に大学とも協力して振り返りの研修会を開催（参加者 35 人）。主体的に楽しくできた発信の意味を多文化共生社会つくりと結びつけて、より深い認識を持つことができた。

5 結果と考察（目標の達成度・課題）～望まれる学校現場での多言語活動～

多言語活動が、私たちや当事者を含め共に活動したすべての人に様々な気付きを与え、多様性豊かな環境つくりに向けた素地を作ることは確認できた。大学生らしい企画発信が、周りの人を巻き込み、広がって地域の環境つくりにも寄与したし、大学生自身が主体的に関わることで、多文化共生社会の実現に向けて意識を新たにしたものと思う。多言語活動は、特別なスキルが必要なものではなく、多様性を尊重する心、対等な人間関係、外国ルーツの人への敬意があれば実現できる活動である。今回、大学の研究者との連携ができて、今後の展開に大きな期待を寄せているが、残念なことに、地域の学校関係者の参加がなかった。子供達に最も密接な学校教育の中にこの多言語活動を広めていくこと、そして「両方の国を愛する」人材に育てていく環境を作ることを願っている。